

理 論 編

目 次

I 研究主題設定の理由	
1 はじめに.....	1
2 前回研究のまとめ	1
3 本グループの子供たちにとっての将来の生活について	
(1) 前回の研究を受けて	
(2) 自閉児の現在の生活の姿について	
(3) 自閉児の将来の生活について	
II 基本的な考え方	
1 「意思伝達の力」とは	3
2 「意思伝達の力」と「伝え合い、分かり合う関係」	3
3 「意思伝達の力」を高めるために	3
(1) 意思伝達の力の基礎となるもの	
(2) 「意思伝達」の場面や対象を広げる	
III 研究内容	
1 「意思伝達の力」の基礎となるもの	5
見通しを持つ	
伝え合う相手を意識する	
伝え合う方法を理解する	
(1) 自閉児にとっての分かりやすさ	
(2) 自閉児にとっての伝えやすさ	
2 意思伝達の場面や対象を広げる	9
IV 実 践.....	10
V 研究のまとめと今後の課題	
1 研究のまとめ	11
2 今後の課題	12
引用・参考文献	12

I 研究主題設定の理由

1 はじめに

本グループで対象とする子供たちは、「自閉症」と診断された子供や日ごろ接している様子から人への関心が希薄で、人とかかわりを持ったり、気持ちを通わせたりすることが難しいと感じられる「自閉傾向」のある子供たちである。わたしたちは、彼らの特性（資料1）に応じた指導を行うことで、彼らが周囲の人とのかかわり方を身に付け、将来、家庭や地域社会でよりよい生活を送ることができるよう、そして、今回の取り組みがその一助となるよう研究を進めていくことにした。

2 前回研究のまとめ

前回の研究で、わたしたちは自閉児と接していて感じる「通じ合いにくさ」を、わたしたちと子供たちの「あいだ」にある「関係の障害」であるにとらえた。そして、それを変容させていくためには、わたしたちと自閉児の両者が高まり合い、歩み寄ることで、互いの理解を深めていくことが必要と考えた。そこで、「自閉児との相互理解を深める指導の在り方を探る」という研究主題を設定し、下記のような研究内容の項目を中心に、実践研究を深めていった。

表1 前回の主な研究内容

(資料2)

教師のかかわり方を工夫する	子供の意思伝達の力を高める
<ul style="list-style-type: none">○ 子供に気持ちを向け、子供の気持ちを感じ取る。○ 積極的に働き掛ける。○ 子供に合わせる。○ 信頼される存在になる。	<ul style="list-style-type: none">○ 社会的認知の発達を促す。○ 意思伝達の意欲を高める。○ 分かりやすい環境を作る。

このような取り組みの結果、わたしたちと自閉児の間で、少しずつ相互理解の深まりが見られ、自閉児からわたしたちへの意思伝達の高まりが見られるようになった。また、課題としては子供の持つ「意思伝達の力」を「個々の子供に応じて高めていく」「生活全般に生かしていく」ための具体的な手だてを探り、実践の充実を図っていく必要があることが挙げられた。

3 本グループの子供たちにとっての将来の生活について

(1) 前回の研究を受けて

前回研究の課題から、わたしたちは、今回の研究では個々の自閉児に応じた手だてを行うことで、生活全般を通して自閉児との相互理解を深め、子供自身の意思伝達の力を高めていきたいと考えた。しかし、わたしたちは、自閉児の意思伝達の力がただ高まりさえすればいいと考えるのではなく、それが自閉児の生活をよりよくするものでなければならないと考えた。そこで、わたしたちは、自閉児にとって将来の望ましい生活とはどのようなものかということを視野に入れて研究を進めていく必要があると考えた。

(2) 自閉児の現在の生活の姿について

本校の自閉児たちのふだんの様子を見ていると、特定の場面ではその子なりに気持ちを伝えたり、場の状況に合わせて行動したりしているが、まだ多くの場合、その気持ちが相手に

伝わっていなかったり、自分なりに理由のある行動でも、社会のルールやマナーに反するという理由で規制されたりすることが少なくないと感じられる。そのため、結果的には「何をすればよいのか分からない」という指示待ちになってしまったり、周囲の人と十分にかかわれなかったりするのではないだろうか。また、家庭でも、同様の様子が見られ、自由時間に何をすればいいのか分からず、気持ちが不安定になって、何かの特異な行動パターンにすがってしまったり、地域の人とのかかわりも希薄であったりする場合が多い。

(3) 自閉児の将来の生活について

ところで、近年QOL（Quality Of Life）を高めるという視点から、障害児・者の生活にとって、「毎日生活していて楽しいと覚くこと」「自分で判断・選択して主体的に生活すること」等（資料3）は彼らの主体的な生活を尊重するために大事なこととしてとらえられている。これは、これからの時代を生きていく自閉児にとっても、当然重視されるべきことと考える。しかし、自閉児が生活全般において、「自分から周囲の人に働き掛け、自分の思いをかなえることで喜びや満足感を感じたり、場の状況を理解し、判断・選択して見通しを持って行動したりする」といったような主体的な生活のスタイルを、自然に身に付けるのは難しい。これらの原因は自閉児の特性に因るものもあるが、その特性を踏まえたかかわり方を十分にできていないわたしたちにも大きな原因があるのではないか。したがって、わたしたちが、自閉児の特性を考慮して適切な支援を行い、それが将来の生活にわたって継続され、その上で、自閉児が望ましい生活を送ることができるのではと考えた。わたしたちは、これまで述べた自閉児の将来の生活にとって必要なことを考え、自閉児にとっての望ましい生活の姿を以下のように考えた。

自閉児の望ましい生活の姿

- 眼前の活動や、一日の生活の流れに見通しを持ち、安定して生活している。
- 周囲の人を意識し、自分からかかわろうとする気持ちを持っている。
- 自分（自閉児）の特性に合わせて、必要なことを分かりやすく伝えてもらい、それを基に自分で判断・選択して行動することができる。
- 自分の気持ちを、相手にとって分かるように伝え、思いを満たすことができる。
- 家庭はもとより、地域の人とも必要に応じて伝え合い、支援を受けながら、地域社会の一員として働いたり、生活したりして、毎日が楽しい、充実していると感じることができる。

わたしたちが考える自閉児の望ましい生活においては、周囲の人とかかわり合うことや、伝え合うことが大切になってくる。そのためには、子供が必要な場面で自分なりに相手と伝え合うことができる力を育てることが必要であると考え。そして、子供を取り巻く人々が、その子にとっての望ましい生活を踏まえた上で、子供に伝え合う力を高めていくことが大切であると考え、以下の研究テーマを設定し、取り組むことにした。

自閉児の意思伝達の力を高めるための指導の在り方を探る

Ⅱ 基本的な考え方

1 「意思伝達の力」とは

自閉児も、自閉児なりに自分の意思を相手に伝えようとしているのだが、その伝え方が相手にとって分かりにくいものであったり、相手が何か伝えようとしているのは理解していても、相手が意図することをうまく受け止められなかったりするために、周囲の人と十分に伝え合っているとは言えないことが多い。一般に「意思伝達」とは、話し言葉だけでなく身振りや表情などを含めた「受信」と「発信」の両面を併せ持つといわれており、「受信」と「発信」が相互になされて成立するものである。（資料4）そこで、わたしたちは、「意思伝達の力」を次のように定義した。

「意思伝達の力」とは、相手の意思を受け止めるとともに、自分の意思も相手に伝えようとする子供自身の持つ力である。

2 「意思伝達の力」と「伝え合い、分かり合う関係」

わたしたちは、自閉児の将来の生活を見つめながら、「伝え合い、分かり合う関係」を目指していきたいと考える。しかし、相手の気持ちを感じ取ったり、思い描いたりすることが苦手な自閉児にとって、相手と「分かり合う関係」を築いていくことは非常に困難であると思われる。そこで、まず自閉児の「意思伝達の力」を高めることで、自閉児とわたしたちのあいだに「伝え合う関係」を成立させていきたい。そして、自分の意思が相手に伝わったり、相手の意思が分かったりすると、自分の生活が今よりも「もっと便利に」「もっと楽しく」なることに

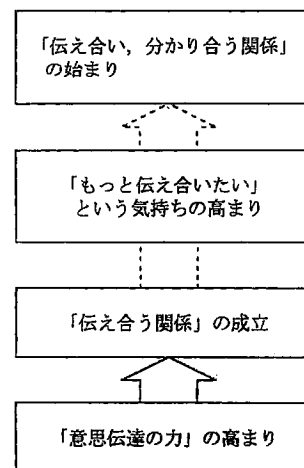


図1 「意思伝達の力」と「伝え合い、分かり合う関係」

気付かせていきたいと考える。そのような経験を積み重ねることによって、自閉児も相手を「自分を支援してくれる存在」「一緒にいて楽しい存在」として認識するようになり、わたしたちが目指す「伝え合い、分かり合う関係」に近づいていけるのではないかと考える。

3 「意思伝達の力」を高めるために（今回の研究内容）

それでは、わたしたちが考える「意思伝達の力」の高まりとはどのようなものなのだろうか。それは、「伝え合う相手を意識し、何らかの方法を用いて相手と主体的に伝え合うことができる」とともに、いろいろな場面でいろいろな相手と伝え合うことができる。」ということであり、意思伝達が質的、量的に高まった状態を「意思伝達の力」の高まりと考える。今回の研究において、わたしたちは、このような「意思伝達の力」の総合的な高まりを目指していきたいと考え、次のような考えの基、研究を進めていくことにした。

(1) 意思伝達の力の基礎となるもの

わたしたちは、自閉児の特性を踏まえて、意思伝達をする上での課題を探っていくことにした。その結果、「見通しを持つ」「伝え合う相手を意識する」「伝え合う方法を理解する」という三つの力を高めていくことが、意思伝達の力を高めることになり、相手とより主体的に伝え合うことができるのではないかと考えた。(資料5)

ア 見通しを持つ

「今、何をするのか。」「いつまでするのか。」「その次は何をするのか。」という見通しを持たせることで、情緒を安定させ、他者のかかわりを受け入れられるようにするとともに、相手の意図を理解できるようにする。

イ 伝え合う相手を意識する

共同注意や模倣、やり取り遊びを通して、「意思伝達」に必要な「自分-相手」という関係の成立を図っていくことで、伝え合う相手を意識することができるようにする。

ウ 伝え合う方法を理解する

話し言葉に限らない自閉児の特性に応じた伝達手段を探っていくことで、相手の意思を受け止めやすくしたり、自分の意思を相手に伝えやすくしたりする。

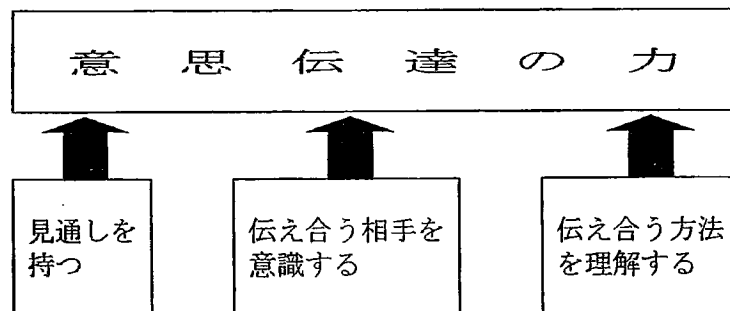


図2 「意思伝達の力」の基礎となるもの

(2) 「意思伝達」の場面や対象を広げる

子供たちの生活の場は学校だけでなく、家庭や地域社会など多岐にわたっている。また、将来において意思伝達が必要な場面や対象はますます広がっていくものと考えられる。そこで、特に重要と思われる以下の三つの視点から、意思伝達を行うための具体的な手だてを探っていく。

- 家庭において、主体的に自分の気持ちや必要な事柄を伝え、自己選択力や自己決定力を育てていくとともに、かかわりを深めていく。
- 地域において、交通機関や公共施設、レジャー施設等の社会資源を活用し、必要な場面で意思伝達を行ったり、社会の基本的なマナー等、場面に応じた対応をしたりして、生活範囲を広げていく。
- 働く場面において、状況や周囲の人の指示を理解したり、必要な事柄を伝えたりすることで落ち着いて仕事に取り組むことができるようにするとともに、あいさつ等基本的なマナーを身に付けることでよりよい人間関係を築いていく。

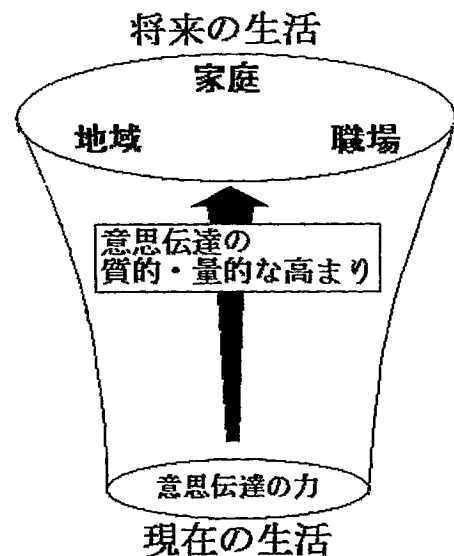


図3 「意思伝達の力」の高まり

Ⅲ 研究 内 容

1 「意思伝達の力」の基礎となるもの

見通しを持つ

わたしたちは、自閉児に「今、何をすればよいのか」という見通しを持たせることで、安心感を持たせ、相手からのかかわりを受け入れられるようにするとともに、自閉児に場面や状況の意味を理解させ、相手の意図を理解できるようにしたいと考える。さらに、見通しを持つことで、その子供なりに自分で考え行動できるようになり、そのことは、主体的な伝え合いにもつながると考える。わたしたちは、見通しを持たせることについて、「スケジュール」と「一つの活動の内容」という二つの視点から探っていくことにした。（資料6）

(1) スケジュール

スケジュールとは、「どこで」「何を」すればいいのかということを、時系列的に示したものである。わたしたちは、子供一人一人の理解に応じて、スケジュールを提示することで、見通しが持ちにくい自閉児の混乱を防ぎ、自分から次の活動に取り組めるようにしていきたいと考える。スケジュールを提示する際は、一人一人の子供に応じて、視覚的な手掛かりの活用やスケジュールの使い方、一度にどのくらいの量の活動を示していくかということを検討していく必要がある。

- 手掛かり … 具体物、カード（写真、絵、文字）、予定表
- 使い方 …
 - ・ カードを持って次の活動場所へ移動する。
 - ・ スケジュールを一か所に設置する。
 - ・ 活動が終わったら自分でチェックする。
- 量 … 次の一つの活動、2、3の活動 半日、1日、1週間

（詳細は
資料6）

(2) 一つの活動の内容

わたしたちは、一つの活動について「どこで」「何を」「どのように」「どのくらい」すればよいのかということを示すことで、自閉児に活動内容を理解させ、自ら意欲的に活動に取り組めるようにしたいと考える。わたしたちは、子供の現在の生活の基盤である家庭と学校の活動について、次のような視点を持って見通しを持たせていくことにした。

（家 庭）

- 家庭において役割を持つ。
お手伝いを決め、毎日同じ時間に行く。
手順や用具を置く場所を決める。手順の明示
- 自由時間に行う活動を増やす。
興味・関心を生かした活動の選定、ルールや手順の明示、選択の場面の設定

（学 校）

- 授業に主体的に取り組む。
活動内容の明示、教材・教具、場の設定の工夫、視覚的な手掛かりを活用した発問の工夫
- 基本的な生活習慣を身に付ける。
活動場所を一か所に決める。手順を決める。手順の明示

伝え合う相手を意識する

意思伝達においては、「自分－相手」という関係の成立が必要であり、そのためには相手を意識することが必要である。そして、自分自身や他者についての理解である「社会的認知（自分自身や他者についての理解）」を促すために、共同注意や模倣、やり取り遊びが必要であると考えられる。（資料7）

○ 共同注意を促す

同じ物を同時に見る共同注意は、特定の対象に相手の注意を促して関心を共有しようとする働き掛けである。物の手渡し、指さしが必要であると考えられる。

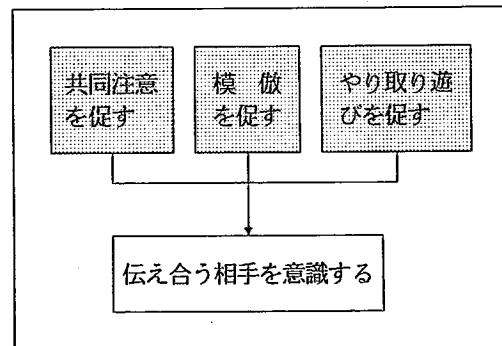


図4

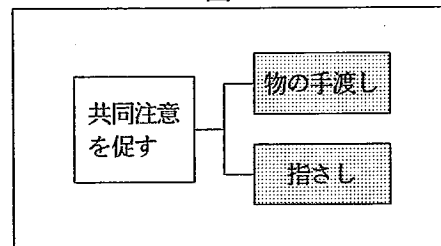
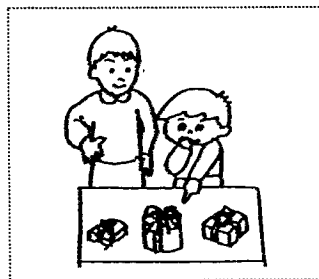


図5



（ちょうだいと言われ物を渡す場面）

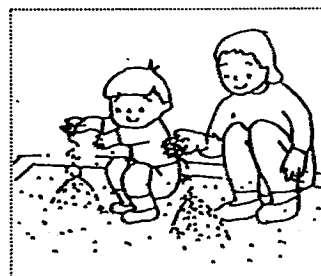


（指さして選択する場面）

※ 相手を見て手渡すように言葉掛けしたり、指さししながら子供と大人が同じものを見たりすることがポイント。

○ 模倣を促す

模倣は他者への意識を促すとともに他者と結ばれている自分を意識することにつながる。そこで、動作と一緒に模倣したり、自閉児とのかかわりにおいて自閉児の動作や音声を積極的に模倣し、少しでも自分や相手に対する意識を高めていきたい。



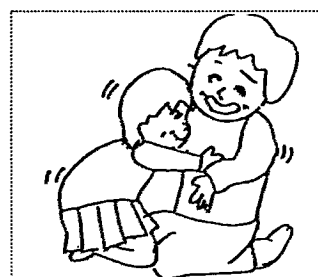
（自閉児の動作を模倣する場面）

※ 「おやっ？」という顔でこちらを見るまで続けることがポイント。

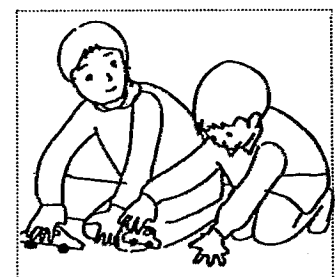
○ やり取り遊びを促す

やり取り遊びによって、人とかかわることの楽しさや快さを経験させるとともに、自分の番、次は相手の番といった役割の交替も経験させることができる。具体的には・・・

- ・ くすぐりっこなど人と遊ぶ楽しさを味わわせる遊び
- ・ ボールのやり取り、ミニカーを走らせ合う、カードを使っの遊び
- ・ CMのフレーズなどを通した言葉での遊び



（くすぐりっこしている場面）



（ミニカーを走らせ合う場面）

※ 子供からもっとやってほしいという要求が生まれたり、遊びの楽しさを感じたりするまで続けることがポイント。

伝え合う方法を理解する

(1) 自閉児にとっての分かりやすさ

ア 自閉児にとっての分かりやすさとは

自閉児の特性を踏まえ、わたしたちは情報の送り手として次のような観点から彼らへの「分かりやすさ」を考えた。

提示する情報の内容を整理する

○ 情報整理の観点

- ・ 一つの場面でどの程度の指示内容を理解できるか。
- ・ 文脈の中で言葉の意味をどう理解しているか。
- ・ 言葉や身振り、具体物、絵カードなどの何を手掛かりにして理解しているか。
- ・ 時間的な見通しをどの程度持てるか。

情報の提供者を限定する

- 一つの場面で情報を提供する発信者を限定する。

情報を送る手段を工夫する

○ 発信者への注意を促す。

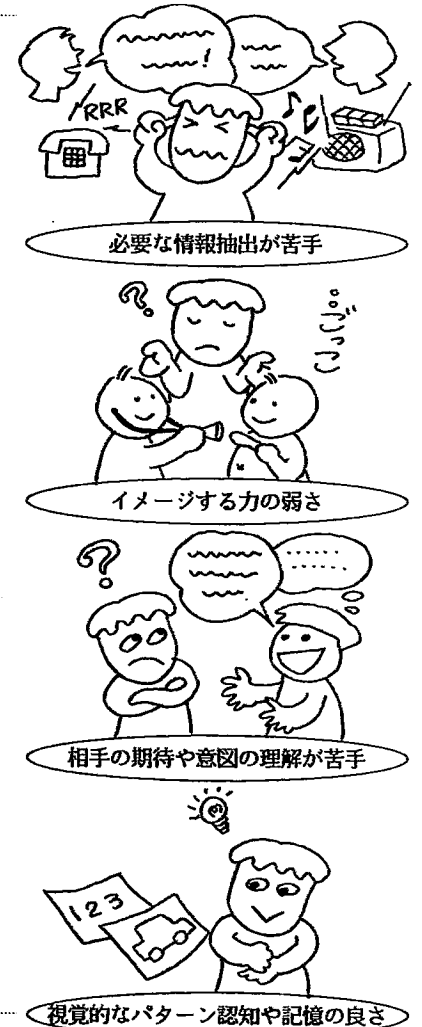
呼名、ブザーやメロディー音、手たたきなどの聴覚刺激を活用する。

○ 指示を明示する。

その時々、すべき必要なことを明確に伝える。

○ 視覚的な情報を活用する。

言葉に加えて、具体物、絵や写真カード、身振りや活動のモデル、数字を伴った手順表や目当てカード等を活用する。



イ 自閉児の判断・選択しやすさのために

自閉児が社会的存在としてよりよく生きていくためには、子供の周りのいろいろな情報から必要なものを判断・選択しながら自己決定的に生活していくことが望まれる。そこで、指示的なかわり方だけでなく、下図のような子供が判断・選択できるような情報の与え方を心掛けていく。



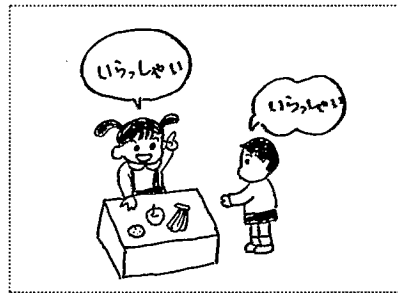
(2) 自閉児にとっての伝えやすさ

ア 自閉児にとっての伝えやすさとは

わたしたちは自閉児が意思を伝達する上での課題を、以下のように整理してみた。



・チューブブランコを交替してほしいのだが、その気持ちを相手に十分に伝えられない。



・売り手の意図や状況に応じて「～をください」などの買い手の側に立った話し言葉を使うことが困難。そのとき「いらっしゃい」というエコラリアも売り手になって活用することも考えていきたい。



・男の子が人形をなくして泣いている女の子に話しているが、一方的なかわりであり、相手の感情や相手との関係を考慮してのやり取りが困難。

これまで、かかわる側のわたしたちも自閉児の意図を十分理解できずに反応が不明確で一貫性がなかったり、意図に沿った反応が十分にできなかったりしてきた面があった。それとともに、わたしたちは上に示したような自閉児の課題を見ると、だれにでも分かりやすい伝達手段に替えていく必要性を感じる。例えば、話し言葉のない自閉児には指さしやサインなどを教えたり、絵カードなどを提示させたりする。また話し言葉のある自閉児には状況に合った話し言葉をその都度繰り返し教えたり、言葉に絵（写真）カードを添えるようにさせたりして、子供たちが伝えたいことを意味付けしてあげるようにする。このようにして伝達行動の未熟さを改善し伝達経験を積み重ねていくことで、「分かってもらえた!」という経験からやり取りを楽しむようになったり、「伝えたい!」という意欲を育てたりすることにつながるのではないかと考える。

イ 自閉児にとって表現しやすく、伝えやすい伝達手段とは

わたしたちは子供に応じた伝達手段を工夫して、生活場面をとらえて指導していく必要があると考える。

(7) 表現しやすく、伝えやすい伝達手段とは

わたしたちは聴覚に対する視覚優位といった自閉児の特性から、右のようなものを伝達手段として考えた。

・具体物 ・写真や絵カード
・サイン ・文字カード など

(i) 具体的な指導の手続き

a 表現しやすい伝達手段を探る

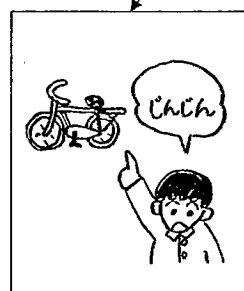
子供の発達段階やコミュニケーションの状態、あるいは親の希望等も考慮しながら、伝達手段を選択する。(資料8)

子供によっては複数の伝達手段を使わせることが有効であったり、話し言葉と併用させることが有効であったりする。右の例のように最初から「自転車に乗りたい。」と言わせるのではなく、まず指さしや絵カードを使って話し言葉を添えていくようにする。そのことが結果として言葉を育てていくことになる。

b 指導場面を考える

伝達手段の使い方や使う場面については日常生活全般を指導の場とするが、まずは要求場面に着目してみたい。自閉児が自発的に意思を伝達しようとする場面を選ぶことが、効果的な指導につながると考える。(資料9)

《具体的な場面で考えてみよう》



2 意思伝達の場面や対象を広げる

子供たちの将来の生活は、進路先での様々な人とかかわりや、交通機関や公共施設の利用等も考慮すると、意思伝達が必要な相手や場面は広がっていく。そこで、わたしたちは、前回の研究基調でも述べた「家庭生活」「地域生活」「職場生活」という三つの観点から、意思伝達の場面や対象を広げていくための指導を探っていくことにした。(資料10)

家庭生活

家庭は子供たちの生活の基盤であり、伝え合う関係の基盤でもある。家庭生活における意思伝達を充実させていくことは、地域や職場での意思伝達へとつながっていくと考える。

- 自分の気持ちや要求を伝える。
 - ・ カード等の伝えやすい伝達手段 ・ 判断・選択の場面の設定
- 必要な事柄を伝える。
 - ・ 電話やメモの活用（外出先から電話で居場所等を知らせる。
来客や電話の伝言を伝える。）
- 学校や職場であったことを伝える。
 - ・ メモや日記の活用



(遊びに行きたい場所を知らせる)

地域生活

自閉児の生活を充実したものにするためには、家族や教師といった限られた人だけでなく、積極的に地域に出掛けて行き、いろいろな人とかかわりながら、多様な経験をしていくことが大切であると考えます。

- 余暇活動を楽しむ。
 - ・ 交通機関やレジャー施設、ファーストフード店等の利用
 - ・ 注文カードやコミュニケーションカード等の伝達手段
- 社会のルールを理解する。
 - ・ 禁止よりも今何をすべきかを伝える ・ 早い段階からの指導(ファーストフード店の利用)



職場生活

学校卒業後、自閉児もまた、作業所、施設、事業所等で、仕事に従事していくことになる。自閉児が職場での意思伝達を行うことで、周囲の人の中で落ち着いて仕事に取り組み働く楽しさや喜びを味わってほしいと考える。

- 必要な指示を理解する。
 - ・ 「どこで」「何を」「どのように」「どのくらい」という視覚的な情報
- 必要な事柄を伝える。(援助を求める、作業の報告をする)
 - ・ カード等の伝えやすい伝達手段
- あいさつや返事をする。
 - ・ エコラリアの活用 (材料がないことを伝える。)



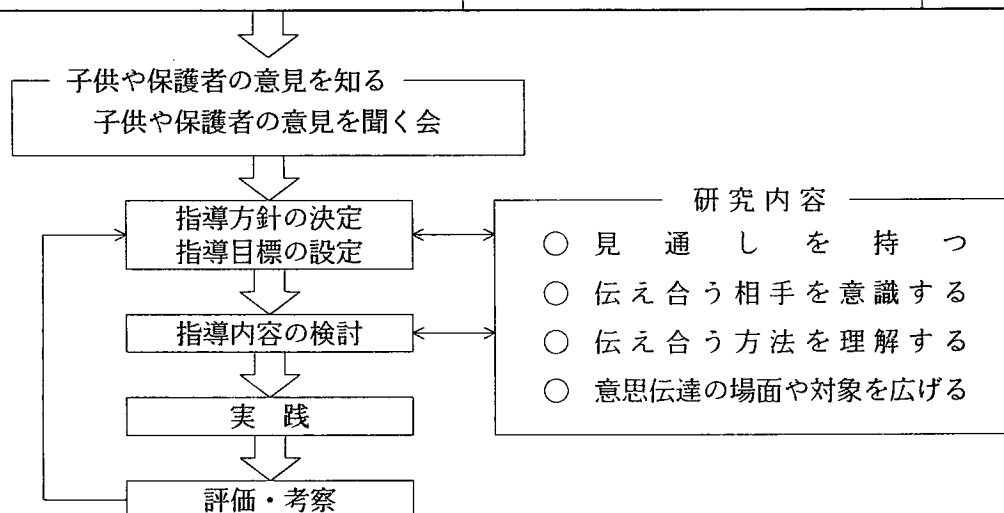
(材料がないことを伝える)

IV 実 践

わたしたちは、本グループの研究の考え方に立ち、以下の手順で事例の実践研究を進めた。

初 期 ア セ ス メ ン ト

観 点	方 法	備 考
現在のコミュニケーションの様子を知る	コミュニケーションに関する アセスメント ・ 日常生活の観察から ・ コミュニケーション・サンプル	資 料 11
時間的な過ごし方を知る	生活 スケ ジ ュ ール	資 料 12
基 本 的 な 情 報 を 知 る	家族構成, 生育歴, 教育歴等	
生 活 範 囲 を 知 る	生 活 地 図	資 料 13
特性や客観的な課題を知る	NAUDS PEP-R	



事例Ⅰ 「話し言葉が伝達手段として機能していないN. T児の指導」中学部2年（男）

事例Ⅱ 「話し言葉は持っているが、周囲の人とうまく気持ちを伝え合うことができず、集団の中では見通しを持ったり、意欲的に活動したりすることが難しいK. Y児の指導」
 高等部2年（男）

事例Ⅲ 「伝え合う方法を理解できず、情緒的に不安定になってしまうA. N児の指導」
 小学部2年（女）

（事例Ⅰ～Ⅲの内容については、実践編を参照）



V 研究のまとめと今後の課題

1 研究のまとめ

わたしたちは、子供自身の持つ力である「意思伝達の力」を高めるためには、「意思伝達の力の基礎となるものを高めること」と「意思伝達の場面や対象を広げること」が必要であると考えた。ここでは、理論研究に基づいて行ってきた三つの事例を通して、明らかになったことを述べていくことにする。（資料14）

「意思伝達の力」の基礎となるものについて

- 見通しを持たせることで、情緒の安定が図られ、相手のかかわりを受け入れたり、相手の意図を理解して目的的に行動する様子が見られた。見通しを持たせる際には、次の活動や活動内容の提示の仕方（形態、量）を子供に応じて工夫していく必要があった。
- 相手を意識することについては、子供が興味・関心を持っている活動を通して、相手とかかわりを楽しめるようになり、相手を意識したり、相手と伝え合いたいという気持ちを引き出したりすることができた。
- 子供一人一人に応じた伝え合う方法を理解することで、相手の意図がより分かりやすくなったり、相手に自分の意図が伝わりやすくなったりした。また、視覚的な手掛かりと話し言葉を併用させたことで、話し言葉の意味が理解できるようになり、適切に用いることも見られるようになった。
- 子供自身が切実に相手と「伝え合いたい」と感じられるような、子供自身の欲求を大切にしたり、意思伝達の場面を設定していくことが大切であった。
- 保護者や教師が子供にとっての「分かりやすさ」「伝えやすさ」という視点からかかわり方や伝え方を工夫したことで、子供が自ら表現したり、伝えたりすることが多くなり、子供の気持ちをより理解できるようになった。
- 「見通しを持つ」「伝え合う相手を意識する」「伝え合う方法を理解する」という三つの力は、それぞれが関連し合いながら高まることで、意思伝達の力を高めていくことが分かった。

意思伝達の場面や対象を広げることについて

- 意思伝達の場面や対象を広げていったことで、子供の生活範囲が広がり、活動のレパートリーが増える等、休日や放課後の生活が充実してきた。
- 地域において活動したり、社会資源を利用したりする際には、いろいろな状況をあらかじめ設定して、子供が意思伝達を行うための手だてをした上で十分練習を行う必要があった。
- このような取り組みを通して、保護者が将来に向けての余暇活動や、自立の在り方に関心を持つようになった。

2 今後の課題

- 子供一人一人に応じた伝達手段を探るために、アセスメントのより効果的な活用方法について検討していく必要がある。
- 地域や職場に、自閉児の特性や意思伝達について理解してもらうための連携の在り方を検討していく必要がある。

【引用文献】

- ・ G. ドーソン編 野村東助・清水康夫監訳（1994）：自閉症 日本文化科学社 P 259
- ・ 文部省（1992）：特殊教育諸学校小学部中学部学習指導要領解説－養護学校（精神薄弱教育編）－ P144
- ・ 小出進編（1996）：発達障害指導事典 学習研究社 P116, 117, 272, 273

【参考文献】

- ・ L. R. ワトソン他（1995）佐々木正美他監訳：自閉症のコミュニケーション指導法 岩崎学術出版社
- ・ E. ショプラー 佐々木正美監修（1990）：自閉症の療育者 神奈川県児童医療福祉財団
- ・ E. ショプラー他編 伊藤英夫監訳（1996）：幼児期の自閉症 学苑社
- ・ 佐々木正美（1993）：自閉症療育ハンドブック 学習研究社
- ・ 高木隆郎他編（1997）：自閉症と発達障害研究の進歩1997／Vol 1 日本文化科学社
- ・ 久留一郎 編（1989）：臨床援助の心理学 北大路書房
- ・ 熊谷高幸（1993）：自閉症からのメッセージ 講談社現代新書
- ・ J. W. アスティントン（1995）松村暢隆訳：子供はどのように心を発見するか 新曜社
- ・ 中根晃（1996）：自閉症児の保育・子育て入門 大月書店
- ・ 野村東助他編（1993）：自閉症の診断と基礎的問題 学苑社
- ・ 若林順一郎，西村辨作（1988）：自閉症児の言語治療 岩崎学術出版社
- ・ 鹿児島大学教育学部附属養護学校（1996）：研究紀要第10集